

今月も心動かされる詩がたくさんありました。
そのなかでも、日常に現れた裂け目を感じるような作品、別の世界への入り口が広がっているような作品に特に惹かれました。
言葉によって今まで見えていた世界が違って見えてくる、世界の手ざわりが変わるのは楽しくもありすこしこわくもある刺激的な体験です。

ティディベアは
皆うつぶせ
こっちを見てるから
村上 陽香

並んだ「ティディベア」たちの視線がふと気になり、うつぶせにしたということでしょうか。生きものに似せてつくられた生きものではないものの視線にざわめく心。けれど、ふつうに正面を向いているよりも、「うつぶせ」のほうが「ティディベア」の存在感が増す気がします。

構内ですれ違うとき
細くなる
人と人
消えずに歩きだす
高良真実

人ごみでお互いがぶつからないようにならだを横にするというおそらく誰しものが経験のある行為が、このように書かれると、もしかしたらその瞬間消えてしまうことがあり得るかもと思わされます。こんなところに裂け目が潜んでいたとは。

街角で明るい服の人ばかり見る
私もうすぐ生まれ変わる
伊丹真

自分だけにこっそり世界の秘密が開かれているよう。心浮き立つ気持ちとともに切実な願いが感じられます。

プリン六つ
抱える理由が欲しかった
エコバッグ忘れたふりをする
合川秋穂

なぜ「プリン六つ」を抱えたかったのか書かれていないところに謎があり、その謎に惹かれます。おかしみとせつなさの同居は、同じ作者の「愛なんてありませんでしたとい

う／探検家の末裔らしい報告」にも感じました。

生涯をこの室内で終える蚊の
私でできたからだを潰す 西春奈

私のためでない命を許せない
今日も手肌にアルコールを擦る 西春奈

蚊を「私でできたからだ」、ウイルスを「私のためでない命」、とらえかたにはっとさせられました。ごく小さなものにも目に見えないものにも命があり、その命に自分が関与しているという意識。「444444444444／／一日に使った鎌 殺生の数」とあわせて、その死を素通りできない思いが伝わってきます。

卒業アルバムで

笑ってる方の佐藤が

死んだ方の佐藤 うすしか

同じ苗字を持っていながら、全く別の運命を歩むことになった二人。卒業アルバムの写真には運命の残酷さを示すようなものはなにも写っていない。一読して強い印象が残りました。

めくりめくる夜
ステープラの強さの単位は枚 藤色

「夜」と「枚」の文字のかたちの相似に、「強さの単位」はほんとうは「夜」で、めくれた夜をステープラで綴じるというスケールの大きな想像が広がります。

向日葵が頭を垂れる
夕焼けに
あやまりたかったこと、
思い出す 桜望子

向日葵に投影された作者の心情。「あやまりたかったこと」という過去形の悔いに胸を衝かれます。人はみな謝りそこなったものを抱えている。

子が描く私は
いつも三つ目

うすしか

子どものお絵描きという無邪気な光景のはずが、世界をがらりと変容させてしまいそうなスリリングな気配に満ちています。同じ気配を、こちらはごっこ遊びの「じゃあお母さんが／おにんぎょう役ね」にも感じました。

水上に建てられている
体育館の
しづかな床に
当てる片耳

佐藤 美貴子

耳は水の音を聴こうとしているのでしょうか。「ときどきは／還れなくなることもある／荒野で／葬儀の列に／まじれば」は白昼夢のような光景。他にも佐藤さんの詩は、幻想空間と現実のあわいをたゆたうようで、隠された物語に惹かれる作品が多くありました。

家中を探しても息を止めると苦しい理由が
見つからない

青野 椰栄

当たり前誰もが知っている事実に、身体仕組みに、違う角度から迫ってゆくような不思議な感触がありました。また、同じ作者の「寝室に行く途中の／階段や歩幅でさえも／試されてるんじゃないの」でも感じた現実の世界になじめない孤独な魂のありようが伝わってきました。

食パンのくぼみ戻らぬ春の宵

長谷川柊香

春の宵に「食パンのくぼみ」をじっと見ている<私>。「食パンのくぼみ」をつけた<私>が自分の生きている証を見ているのかもしれない。

浦歌無子